

小倉悠紀の詩情 — メルヘン

—— (詩集「モザイク」より)

夏の夜のメルヘン

幼ない頃でありました
遊び疲れてお庭の椅子に
置いて忘れたお人形が
私の名前を遠くから
呼んで居るよな夜でした

夜半に目覚めた私は
窓からお庭を眺めたら
忘れた筈のお人形は
何処にもなくて大空に
三日月さまが在るばかり

幼い私は驚いた
その三日月に何とまあ
お人形さんが腰掛けて
“おいでおいで”と私を
招いて居るのでありました

夢見心地の私は
眼をこすりもう一度
高いお空を見上げると
お人形さんは束の間に
姿を消しておりました



“やはりお庭の椅子かしら”
見れば其処には何もなく
青い楓の葉が一枚
白いお椅子にキラキラと
月の光が射すばかり

“これは夢ね”と思いつつ
ベッドの上の転寝に
ふと気が付けば朝が来て
お人形さんは椅子の上
昨日のように居りました

私はお庭を駆けて行き
お人形さんに“ご免なさい”
幼な心のその中に
映し出された幻影の
一駒なのでありました

あれから長い年月が
経った今でも忘れぬ
私のロマンでありました
真夏の夜の懐かしい
メルヘンなのでありました。

